

# ダーク線り人形印象記

萩原 朔太郎

英國人ダーク一座

西洋あやつり人形芝居

自夜七時 於當地

柳座劇場

冬近い郷里の町の四辻で、僕がこの珍しい廣告を見たのは、小學校に通つてゐる幼年の時のことであつた。性來夢想家で、エキゾチックな憧憬を多分に持つてゐた僕は、西洋あやつりといふ不思議な名前、英國人ダークといふ異國趣味の名前につられて、譯もわからずその劇場へ走つて行つた。もとより幼年の時の事であり、遠い昔の色あせた記憶であるから、今日その印象を書き綴るべく、あまりに漠然とした夢の忘失を感じてゐる。しかしながら一面からは、子供の時の印象ほど、却つて強く忘れがたいものはないのである。當時この線り人形を見た人は、おそらく僕の外にも多いであらう。以下自分の語るところに、もし記憶の誤があ

るならば——そして勿論あると思ふ——他の人々のより、健全な記憶によつて、幸ひ訂正していただきたく、あへてこの印象を書く次第である。

## 英國人ダーク

開場を知らせる鈴につれて、舞臺に一人の外國人が現はれて來た。白髮童顔の老人であり、古風なフロックコートを着てゐる。僕等は一見して、それがダークであることを直感した。如何にも「童話のお叔父さん」と言つた感じがする、上品で人懐かしい風貌の老人だつた。彼は觀客に一揖した後、何か英語でベラベラどしやべり始めた。側に日本人の通譯が居て、次のやうな意味の取りつきをした。

「滿場の紳士淑女諸君。私が當一座の座長ダークであります。これより御覽に供しまする西洋あやつり人形は、我が本國イギリスに於ては勿論、獨逸、佛蘭西その他歐洲大陸に於きましても、至るところ多大の喝采を博して居ります次第。今度世界を漫遊致しますついでを於て、昨年日本國に立ち寄り、東京諸方の劇場にて公演致しましたところ、悉く觀客諸君の御意に適ひ、至るところ多大の御喝采を博し居る次第であります。御當地は始めて御見得なれば、とりわけ熱演を以て御高覽に供すべく、ひとへに御評判を願ひ奉る次第であります。云々。」

かうした口上を述べてる間に、背後の黒幕の間から、小さな人形が幾度も顔を出して覗きに來る。中には小道具の椅子など運んで來て、舞臺にまだ人間が居るのを見、吃驚して樂屋に逃げ込む奴なども居る。なかなかユーモラスで愛嬌がある。

## 第一幕

深夜の街の光景である。背景には都會の家々が眠つて居り、高層建築の窓々には、赤や青やの灯がついて居る。所々に寺院の圓塔ドームがあつて、空に大きな月が出て居る。

靜かにピアノの音が聽える。曲は眠たげなメロヂイを奏して居る。

暫らくして一人の酔漢が現れて来る。繼ぎ足（西洋竹馬）をしてゐるので、足ばかり長く見える。兩手に酒の瓶をもち、ラツバ飲みをして舞臺をよろけ歩いて居る。それから眠たげな聲を出し、奇妙な調子で歌を唄ふ。（歌はもちろん英語であり、天井でダークが唄つて居るのである。）

酔漢の様子が、だんだん狂的になつてくる。ピアノの音樂も烈しくなり、唄も亂暴でグロテスクになつてくる。

酔漢が酒瓶を投げ始める。家の屋根へ向つて、窓へ向つて、街路へ向つて、並木へ向つて、やたらむやみに何でも構はず投げつける。酒瓶はポケットやツボンの中から、何本も取り出される。正に酒精中毒の妄想狂亂といふ感じである。

最後に一本の瓶を取り出し、空の月を目がけて投げつける。命中！ 月が壊れて地上に落ち、舞臺に碎けた破片が散る。ガラガラといふ凄まじい大きな響。（幕）

（この仕掛は、月の所が幕の穴になつて居るのである。酒瓶がその穴に這入ると同時に、幕が落ちて月が見えなくなつてしまふ。舞臺に散る月の破片は、もちろん天井から投げ出すのである。）

## 第二幕

田園の春の景色である。背景には牧場があり、色々な花が咲き、地に若草が崩えてゐる。

右手に教會があり、オルガンの音が聽える。肥つた田舎の老婆が一人、手に大きな聖書を抱へ、杖を突いてよぼよぼと歩いて来る。田舎の春。麗らかな日曜日朝なのだろう。

老婆が讚美歌を唄ふ。それが次第に田舎の踊り唄に變つて來、杖で拍子を取りながら腰をふる。すると腰のスカートから、小さい豆粒ほどの子供が跳び出し、舞臺をちよこちよここと踊り廻る。

老婆は相かはらず腰をふり、杖で地面を突きながら拍子を取つて居る。第二番目の子供が跳び出して來る。それから第三番目、第四番目と、限もなく續々と現はれて來る。皆豆粒程の小供であり、漸く小指ぐらひしかない。それが幾人もなく無數に跳び出し、老婆の杖の調子につれて、舞臺をピョピョピョを踊り廻る。(幕)

(この幕の印象は、田舎の平和な春を聯想させる。信心深い農家の老婆が、幾人ともなく子供を生んで、平和な生活をして居る所を、童話的な形式によつて表象したものである。前の醉漢の出る幻想的な舞臺と共に、たいへん詩味の深い舞臺であり、牧歌風のなつかしい印象を強く受けた。)

## 間幕

ダークが再び舞臺に出て來る。そして今迄のは餘興であり、これからいよいよ本筋の面白い芝居に這入ると言ふ。劇の題はチャリツプ、トリツプといふ二人の盜人の一代記で、滑稽百出、最も奇抜で面白いものだと言ふ。この説明の間も、前の如く背後の幕の隙間から、人形が幾度も顔を出して覗きに來る。中にはそつと拳骨をふり廻し、ダークに早く引ッこめといふ身振りを示しながら、急いで逃げ込んでしまふ人形もある。

(以下數幕あつたやうだが、自分の記憶に残つてゐるのは二幕しかない。よつて二幕だけ書くことにする。幕の順序は不明である。)

## 第 幕

市街の或る一角である。舞臺右手に理髪店があり、赤と青で塗つた棒看板が、家根の横から往來の方に突き出して居る。反對の側の舞臺から、二人の變テコな人物が歩いて居る。これがチャリツブとトリツブであることは、劇の進行によつてすぐに解つた。

二人は何か耳打ちをする。それから忍び足をして、そつと理髪店の窓に近づいて來る。すると看板の飴ん棒が、人間の腕のやうに動いて、窓に手をかけた奴の頭を殴りつける。も一人の奴が忍ん下來る。これもまた殴られる。

チャリツブとトリツブが喧嘩を始める。互に自分を殴つた奴を、對手だと思ひちがへてゐるからである。

馬鹿々々しい喧嘩。亂暴な掴み合ひ。滑稽。愚劣。ナンセンス。目茶苦茶騒ぎ。

喧嘩してゐる二人の頭を、棒がまた慘酷に殴りつける。とても痛さうな音がする。カチン！ コチン！

カチン！

そこで二人は和解し、協同の敵である棒に向つて掛つてくる。風車に突撃するドンキホーテのやうな工合に。

棒と人間との大戦争！ 勇壯悲絶。言語同斷。デタラメ大騒動！

人間が遂に勝利を得る。そして二人の盗人は、窓から家の中へ這入つてしまふ。舞臺しばらく空虚。急にけたたましい聲が起る。家の中から女が逃げ出して來たのである。續いて二人の盗人が追ひかけてくる。

女は寢衣をきてゐる。盗人がそれを脱がさうとする。女の悲鳴！

二人の盗人が、遂に女の寢衣を奪つてしまふ。それから尙下着も奪つてしまふ。女の悲鳴！

裸の女と、追ひ廻す二人の男と。慘酷。猥褻。グロテスク。大混亂！

巡査がやつて來る。英國の巡査。ヘルメット帽を被り、大きな棍棒を持つてゐる。

巡査と盗人との立ち廻り。馬鹿と間抜けの競技會。頭の上に足が立つたり、脊中から手が出たりする。(幕)

## 第 四 幕

田舎の旅館。舞臺左寄りに寢臺がある。此所へ前幕の盗人の一人が來る。すぐ衣服を脱ぎ、寢衣にかへて寢臺に眠る。

夜が次第に更けて行く。時計が十二時をうつ。どこからとなく物凄い響が聽える。燈火が自然に暗くなり、陰氣な影が壁に映る。化物屋敷である。

部屋の四方の隅々から、無数の鼠が現はれて來る。そして盗人の寢てゐるベットの土上へ、續々として登つて來る。ベットの脚を、後から後から這ひあがつて、黒い紐のやうに無氣味な列を作つてゐる。

寢てゐる男が目を醒す。びつくりして悲鳴をあげ、一尺も高く寢臺の上に跳びあがる。瞬間！ 鼠はすつ

かり消えてしまふ。

男は安心して横になり、また眠入つてしまふ。舞臺はしばらく空虚。

再度また隅々から、影のやうに鼠の一隊が現はれて来る。そしてまた前のやうに、寢臺の脚にそつと這ひ登る。黒い、長い、氣味の悪い鼠の紐！

寢臺の男が目を醒す。跳びあがる。鼠が一齊に消えてしまふ。

男が安心して眠る。また鼠が現はれて来る。反覆。

男は神經過敏になつてしまふ。恐怖によつてビクビクし、鼠が現はれても來ないのに、幾度も枕から頭をあげ、驚いて跳びあがつたりする。(その度に見物が笑ふ。)

しかし仕舞に疲れてしまふ。そして何時かまた眠つてしまふ。

窓が自然に開閉する。天井で怪しい物音がする。

青白い燐火が燃え、部屋の内を往復する。

椅子がガタゴト動き出す。

寢臺の上の天井から、女の長い髪が垂れさがつて来る。それが丁度、寝てゐる男の顔に觸る。

男が魘うなされる。苦しげな呻うめき聲！

青白い燐火が、さかんに部屋の中を往復する。

幽霊が現はれる。髪の毛をふり亂して、身體が空中に浮いてゐる。日本の怪談に出るそれと同じく、足が人魂のやうに尾を曳いてゐる。女である。

寢臺の男が目を醒す。すぐ目の前に幽霊が居る。跳び起きて逃げやうとする。しかし幽霊が上に乗つてゐる。

起きあがれてない。苦悶！ 絶叫！ 斷末魔の大反轉！

巡査が突入して来る。男の悲鳴を聽いて來たのである。

幽霊が消える。男は巡査を見て逃げやうとする。幽霊がまた出て押へつける。

惡漢遂に捕縛される。 (終幕)

後記。

その後少したつてから東京に行き、淺草花屋敷でダーク線り人形の看板を見た。前の面白かつた印象が忘れられないので、再度見物席に入つたけれども、前に田舎の劇場で見た時とは、萬事様子がちがつて面白くなかつた。後に聞けば、當時既にダークは本國に歸つてしまひ、その技術を學んだ日本人が、ダーク線りの名で演じてゐるのだと言ふことだつた。それは藝も下手であつたし、ユーモアやグロテスクの氣分がなく、妙に眞面目くさつて詰らない演出だつた。

編輯者後記

淺草花屋敷では今も線り人形を上演してゐる。萩原氏の後記の通り、ダーク當時とは上品化してゐて、やゝ中途半端の感をまぬがれないが、ダークの得意な出し物の一つだつた骸骨踊などは今見てもなか／＼面白い。これはアメリカのトニー、サアグ一座でもやつてゐるが、起原は伊太利のシシリイ島に今も遺つて居るものからだらうと筆者は思惟してゐる。